



2018-'19

Weekly Report

2019/ 4 / 3 (27)

BE THE INSPIRATION RI 会長 バリー・ラシン

クラブ会長テーマ 進化の足跡を残そう

創立 50 周年記念式典・祝賀会 盛大に開催



第 2402 回例会報告

■創立 50 周年記念式典&第 2402 回例会

第 2402 回例会は 3 月 13 日 (水)、パレスホテル立川・4 階ローズルームで開催された、創立 50 周年記念式典に振替になった。

■全員集合

13 日は朝から晴天になった。まだサクラの開花宣言は出ていないが「春近し」を感じさせる陽気になった。

準備の時間を十分に取って、集合時間は 12 時 30 分に設定された。集合場所はパレスホテル立川の 3 階「梅

の間」。会員の控え室にあてられた部屋には、定刻前に大半の会員が集合していた。

この前に、すでに記念品やプログラム、お礼状、出席名簿などの袋詰めは完了したようだ。そこで、この部屋で個人の写真撮影をすることにした。この写真は記念誌に掲載する他に、この先 5 年間の会員名簿にも使用する。

この日は「会員のにこやかな顔を取ってほしい」と、写真屋さんに注文をしたので、写真屋さんと記念誌委員会のメンバーも協力して会員の『微笑』を撮ろうと努力をした。

■準備万端

記念誌撮影後は、それぞれが担当の部署につき準備を



RI 第 2750 地区 多摩中グループ

東京国立ロータリークラブ 会長 喜連 元昭 幹事 小澤 崇文

例会日：毎週水曜日

例会場：谷保天満宮社務所 2 階 東京都国立市谷保 5209

事務所：東京都国立市谷保 5234-1 TEL:042-575-0770 FAX:042-572-8666

E-MAIL: kunitachi-rc@sage.ocn.ne.jp WEB: http://kunitachi-rc.com/

会報委員：岡本 貞雄・遠藤 直孝・千葉 伸也

進めていった。記念品の袋詰めはすでに作業は終わったようだが、総合司会を務める柴宮さんと寺澤 SA。それに小澤（崇）幹事と千葉会員、岡本（正）式典委員長までも、開会ぎりぎりまでプログラムの確認をしていた。

2時35分から全員で記念撮影。会員、ご夫人、事務局の63名は、やや緊張した表情でカメラに収まった（写真は1ページ）。▲ホテル入口の案内看板



受付開始は3時30分。その頃には多摩中グループの事務局も受付の配置につき、「いよいよ」という緊張感が感じられた。着飾った会員夫人たちは「お出迎え」の配置に付き、受付の担当もスタンバイした頃、早くも登録を済ませた出席者で会場は一気に華やいでいった。

■オープニング・ムービー

「開会10分前です」のアナウンスが流れ、そして「開会5分前です」の途中から、会場が暗くなり始めた。『東京国立ロータリークラブ・創立50周年記念式典・祝賀会』の文字が左右のスクリーンに映し出された。

オープニング・ムービーは、当クラブの誕生から、奉仕活動の足跡などを紹介するもので、映写時間は5分13秒である。計画では、このオープニング・ムービーが終わった段階で「お待たせいたしました。只今から…」と、柴宮さんのアナウンスが始まることになっていた。

■いよいよ開会

会場の照明が戻り、いよいよ式典の開会だ。この場面、通常であれば「開会のことば」から入るところだが、当クラブは時間的なことも考慮して「歓迎のことば」とし、その中で「記念事業の報告」も入れてもらうことにした。

「それでは開会に当たりまして、このたびの周年行事の総てを統括し、その準備に1年余りを費やして、晴れ



▲多摩中グループの事務局も配置について受付開始



▲開会の前に放映されたオープニング・ムービー

てこの日を迎えました創立50周年記念事業実行委員長、第20代会長の小澤孝造会員に『開会と歓迎挨拶』をお願いいたします」というアナウンスに、喜連会長と共にすでに壇上にあつた小澤（孝）実行委員長は、実に堂々として落ち着いた挨拶をされた。

■式典（2302回例会）はスムーズに進行

第1部の式典は例会も兼ねることになっているので、ここで司会が柴宮さんから、SAの寺澤会員に引き継がれた。

これからは「開会点鐘」から「閉会点鐘」まで、式次第に沿って進行する。2面のスクリーンにはリアルタイムに次第が映され、式典はリハーサルの効果があつてか順調に進んだ。（千葉会員がパワーポイントで作成）

■新入会員の紹介

式典の会長挨拶の最後に、喜連会長は新入会員の小松さんを紹介した。記念式典で入会する例は前にもある。創立35周年（山城年度）のときの工藤さん（弁護士）だ。その時は鈴木ガバナー（立川 RC）にバッジを付けてもらったことを思い出す。

いずれにしても記念式典に入会する、すなわち会員増強はクラブにとっては発展を意味するもので、この場面でアピールできたことが誇らしく感じた。

■ゆったりと休憩

記念式典は順調に進行して、喜連会長が閉会点鐘したのが16時44分。予定より16分も早い。記念講演は



▲記念式典で挨拶をする喜連会長

17時15分からなので休憩時間が延びてしまった。

しかし、休憩時間が長くなったことで、気持ちの余裕ができ、この時間を利用して知人の席にご挨拶に回ったりで、皆さんゆったりとした時間を楽しんでいただけたように思った。

■記念講演

記念講演の講師はジャーナリストの櫻井よしこ氏で、「激動する世界と日本の進路」というテーマで講演をされた。事前に「写真撮影と録音はダメ」ということなので、その内容を書き残すことはできないが、講演の趣旨は「憲法を改正して、国防の危機から脱出せよ」ということを力説された。



●「白村江の戦い」を例に国防の強化を
櫻井氏は白村江の敗戦を例にされた。新しい歴史教科書では「白村江の戦い」を次のように説明している。

●「白村江の戦い」を例に国防の強化を

櫻井氏は白村江の敗戦を例にされた。新しい歴史教科書では「白村江の戦い」を次のように説明している。

*白村江（はくすきのえ又ははくそんこう）の敗戦

任那が新羅にほろぼされてから約1世紀、朝鮮半島の三国は、あいかわらずたがいに攻防をくり返していた。7世紀のなかばになると、新羅が唐と結んで百済を攻めた。唐が水陸13万の軍を半島に送り込むにいたって、日本の国内には危機感がみなぎった。300年におよぶ百済とのよしみはもとより、半島南部が唐に侵略される直接の脅威を無視できなかった。

中大兄皇子は、662年、百済に大軍と援助物資を船で送った。唐・新羅の連合軍との決戦は、663年、半島南西の白村江で行われ、2日間の壮烈な戦いののち、日本軍の大敗北に終わった（白村江の戦い）。日本の軍船400隻は燃えあがり、天と海を炎でまっ赤に焼いた。こうして百済は滅亡した。

いつの世にも、敗戦は次の時代に強い影響と反動をおよぼす。唐と、新羅の本土侵入をおそれた日本は、防人を置き、水城を築いて、国をあげて防衛に務めた。防衛努力は、日本における国家統合の意識をおのずと高めた。

●櫻井氏の「日本の進路」とは

中国が再び、強大な力を有し、時代に逆行する中華大帝国の再来を目指し、周辺国への圧力を強めるいま、日本は、歴史を振りかえり、独立国として、先人たちがどのような誇りと勇気を持ち続けたかを思い出さなければならない。

トランプ政権はいま、先進国首脳会議（G7）に中国とロシアを入れる考えさえ提示している。世界の秩序は基盤が崩れ、大きくかわろうとしているのである。この



▲一橋大学男声合唱団『コール・メルクール』

ときに当たって、わが国日本が歴史から学べることは多いはずだ。（週刊新潮・2017/6/8号『白村江の戦い、歴史が示す日本の気概』より転載）

また、領土問題に関して『領土問題は主権問題でありその他の問題とは決定的に性質が異なる。国を取るか取られるかの瀬戸際に立ついまこそ、日本は領土を防衛する究極の気迫と力を現実の形にすべきである』（国防の危機！尖閣を護れ『週刊新潮』2012/9/27号より転載）

●櫻井効果

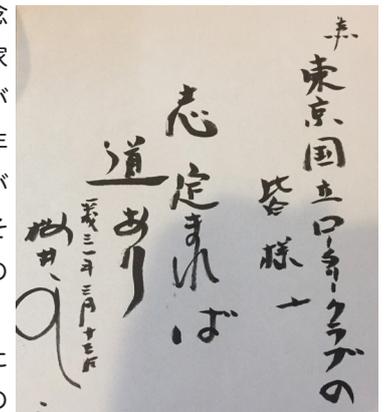
今回開催された記念式典には、会員とご家族を含めて323名が出席された。40周年が267名、45周年が218名だったので、それと比較しても抜群の出席率といえる。

この出席率を高めたのが、櫻井よしこ氏の人気ではないだろうか。記念式典への出席勧奨に他クラブを訪問しても「櫻井よしこの講演が楽しみだ」という声が多く、またグアム地区大会でも出席登録をされた方々から同様の声を耳にした。

当日、講演が始まる前に、自席の椅子の向きを正面にして、聞き漏らすまいとする方々をみて、その期待の大きさが分かった。何れにしても、櫻井よしこ効果は大きく、記念講演は大成功に終わった。

●当初の計画では「記念講演」はなかった

創立50周年記念事業実行委員会が組織され、事業の内容が検討された時点で「記念講演はやらない」ということになっていた。しかし、近年開催された他クラブの記念式典に多く出席した小澤（孝）実行委員長から「やはり記念講演はあったほうが良い」という意見があり、



また、式典を演出する意味からも『心に残る講演会』を望む声もあって、記念講演開催の方向で計画を進めることになった。(昨年度の週報 35 号に掲載)

■華やかに、和やかに祝宴を開催

櫻井氏の講演は5分延長されたので、その後に開催される祝賀会は18時35分からとなった。まず、オープニングミュージックは、地元一橋大学男声合唱団『コール・メルクール』の出番だ。男声合唱団といっても女声が入っていたので、混声合唱団かもしれない。

「一橋大学校歌」や「野ばら」など数曲歌ったところで、小川副実行委員長の開会の挨拶で祝賀会が華々しくオープンした。ご来賓の祝辞は2名。永見国立市長と長島衆議院議員だ。お二人ともに当クラブ50年の実績を称え、今後ますますの発展を願っていただいた。

乾杯のご発声は、多摩中グループ安保ガバナー補佐。全員起立してシャンパンで「カンパイヤ！」。会場はそれまでの緊張感が和らいで明るくなったようだ。

試食会までして吟味した料理が運ばれ、コンパニオンが配置についてサービスをする。わが会員も知人を探しては接待に回るといふ、華やかに、そして和やかに至福のときが流れていく。

■成功裏に終わった記念祝賀会

祝賀会も開会から2時間を過ぎた頃、恒例の「手に手つないで」の合唱が始まった。ソングリーダーの関(重)会員がタクトを振り、会場いっぱい輪をつくって、手を繋いで大きな声で歌った。

「手に手つないで」の合唱が終わると、やがて閉会の雰囲気が出てきた。閉会の挨拶は時田副実行委員長が務めた。

祝宴の名残を惜しみながら帰路につく方々からは「国立らしい上品なパーティーでした」とか「良かったよ」「最高！」などのお褒めの言葉をいただいた。私は心に叫んだ。「良かった。大成功だ！」。

■クラブの力を結集

小澤(孝)実行委員長を紹介した司会者は「その準備に1年余りを費やして、晴れてこの日を迎えました……」と言ったが、これはクラブ全員にも通用することである。

小澤(谷)年度がスタートしてすぐに創立50周年記念事業実行委員会の組織図が配られた。それから、はたして何回準備を重ねてきたことだろう。

そして、その結果が現れるのが3月13日である。事前にスケジュール表が配布され、各自の役割分担が表によって示された。実に細かな指示が書いてある。当日はそれに従って配置につき作業をした。今回の式典・祝賀



▲祝賀会のフィナーレは「手に手つないで」の大合唱が成功裏に終わったのも、会員各位がそれぞれの役割を理解し実行した結果であり、これを機にクラブの結束はより強まったように感じた。

■保存した資料を活用

今回の式典・祝賀会では、準備の段階から相当数の資料が検討され参考にされた。その大部分がこれまでに実行した周年事業の記録である。

当クラブでは5年ごとに周年事業を実行しているが、その組織、予算、事業内容までも事務局に保管されている。近年はパソコンによって、いつでも必要な資料が引き出せるので、効率的にもメリットが多い。

例えば、司会の台本などは35周年から保存しており、それを土台にして、より完成度の高いものになっている。祝賀会が終わってから、私は司会を務めた柴宮さんを「上手でした」と労った。彼女は「あれだけしっかりとした台本があれば誰でも上手くできますよ」と謙遜していたが、これは司会の台本に限らず、周年事業のあらゆる作業に言えることではないだろうか。

■先人の遺産

当クラブは「認証状伝達式に、全国105クラブから1,750名が参加した」ことを自慢する。いつも耳にすることなので、特別なことのように思えなかったが、よく考えるとこれは大変なことである。

案内状はどのようにして出したのか。受付は、会場案内は、会場の設営は、音響は、祝賀会の設営は、お土産などは、32名の会員とご夫人方で、どのようにして成功させたのだろうか。

このことを考えると、50周年記念事業(記念誌は未発行)が成功したのも、これまで在籍した先輩会員の築いた実績がベースにあることを認識すべきである。

■むすび

創立50周年は特別は年度である。準備の段階から、これまでの周年事業と違った緊張感があった。結果的に成功裏に終わってホッとしている会員も多いと思われるが、何よりの収穫は友情が育ち、団結がより強固になったことである。(文・岡本貞雄会報委員長)